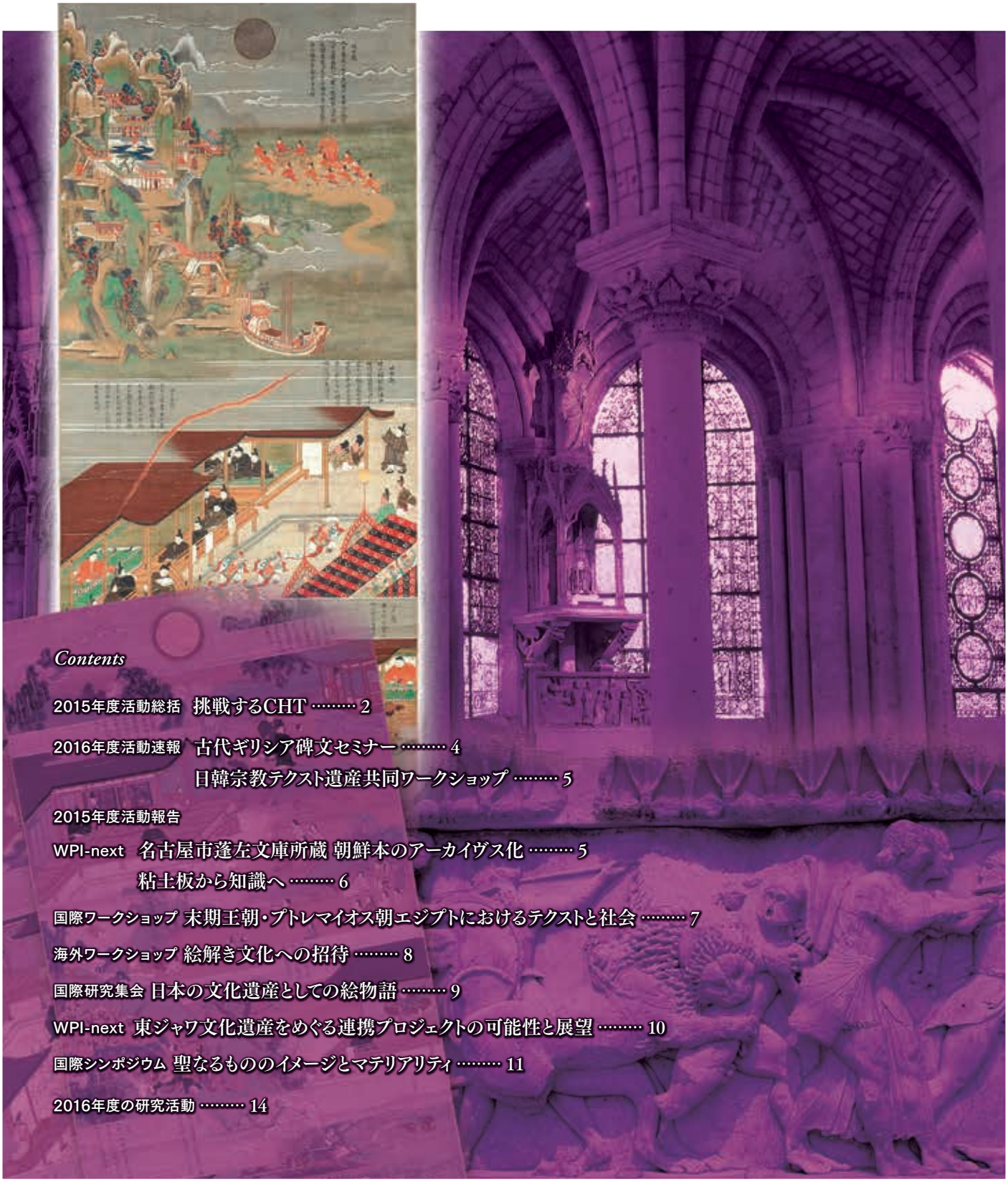
# CHT Newsletter

*Research Center for Cultural Heritage and Texts*

2016 No.2 September

名古屋大学文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センター

*Contents*


2015年度活動総括　挑戦するCHT …… 2

2016年度活動速報　古代ギリシア碑文セミナー …… 4

日韓宗教テクスト遺産共同ワークショップ …… 5

2015年度活動報告

WPI-next　名古屋市蓬左文庫所蔵 朝鮮本のアーカイヴス化 …… 5

粘土板から知識へ …… 6

国際ワークショップ 末期王朝・プトレマイオス朝エジプトにおけるテクストと社会 …… 7

海外ワークショップ 絵解き文化への招待 …… 8

国際研究集会 日本の文化遺産としての絵物語 …… 9

WPI-next 東ジャワ文化遺産をめぐる連携プロジェクトの可能性と展望 …… 10

国際シンポジウム 聖なるもののイメージとマテリアリティ …… 11

2016年度の研究活動 …… 14

# 挑戦するCHT――あらたな人文学の展開へ

阿部泰郎
名古屋大学文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センター長・教授

人類文化遺産テクスト学研究センター（CHT）は、人類の多様かつ豊かな、そして測り知れぬ価値を秘めた文化遺産を、人文学の“知”を結集して探求し、あらゆる位相のテクストとして解明することを目的として設立された。その成果を社会に共有し、未来に継承する営みを援けることも、使命のひとつである。アーカイヴス・物質文化（マテリアリティ）・視覚文化（イメージ）の三部門がその実践のための柱となり、互いに連携しつつ領域融合的な学術創成と国際的な研究交流を同時に展開する、そのプラットホームになることが求められている。こうした理念（ヴィジョン）とこれまでの実績が認められ、日本学術振興会の科学研究費基盤(S)「宗教テクスト遺産の探査と綜合的研究―人文学アーカイヴス・ネットワークの構築」（研究代表者：阿部泰郎、2014～18）、同基盤(A)「古代地中海世界における知の伝達の諸形態」（研究代表者：周藤芳幸、2015～18）が相次いで採択され、ただちに計画していた大規模な先端的かつ国際的な調査活動や研究交流をCHTを通して実施することができた。

発足から二年を経て、その間、CHTの主催する国際研究集会、ワークショップ、フォーラム、公開講演会、セミナーなど、多彩な学術交流が企画・運営され、また他の研究機関や学会との共催事業も多数行われている。その成果の一端は、年刊の学術刊行物として創刊された『HERITEX』に収録され、そこに所属するメンバーや研究員たちの活動の詳報も載せている。2015年秋には、「アジアの中の日本文化」研究センターと連携し、まさしく国際的なテクスト文化遺産である蓬左文庫の朝鮮本を中心とした「豊かなる朝鮮王朝の文化」展に協力し、韓国国史編纂委員会の要請に応え、その中の至宝『高麗史節要』全冊のデジタル撮影・データベース化事業に取り組んだ。それを記念する国際シンポジウム「文化遺産としての朝鮮通信使」も開催した。こうした試みが種子となって、より本格的な国際文化遺産アーカイヴス共同体のような機運が生まれることを望んでいる。

この他にも、物質文化部門では、国際ワークショップ「末期王朝・プトレマイオス朝エジプトにおけるテクストと社会」が開催され、海外では視覚文化部門がハイデルベルク大学と共同した国際シンポジウム「聖なるもののイメージとマテリアリティ」が行われた。これらには、海外の第一線研究者を含め、多数の研究者に参加していただいた。その中には本学の院生や若手研究者も加わり、目覚ましい活躍を見せている。また、物質文化・アーカイヴス部門共同で、ベルリン自由大学COEの国際ワークショップに招聘されて報告・講演を行うなど、欧米の主要人文系大学との研究交流は飛躍的に多角化している。更なる段階では本センターと海外研究中枢大学との国際的な研究拠点形成を目標としている。

これらの活動の基盤となる多種多様な文化遺産とそのテクスト学的研究については、日々着実な成果を蓄積し、その公開や利用に向けての作業が続けられている。アーカイヴス部門の真福寺大須文庫の総目録データベース作成や、奥三河花祭の太夫所蔵文献アーカイヴス化、物質文化部門のエジプト・アコリス遺跡発掘や碑文の集成・解読など、基礎的なデータ採訪とその整理に厖大な時間と人の手が費やされている。そうした学術的成果として、『中世禅籍叢刊』などの資料集公刊が持続しているのである。これらの研究が結実する土台となる活動を決して途切れず発展させることも、CHTの責務であろう。

こうした多角的な文化遺産研究を更に深化させ、かつ現代社会に向けたアクチュアルな問題提起として、名古屋大学の学内公募に応じて提案したのが、「文化遺産創成と記憶の力のテクスト学」である。昨年の準備ユニットを経て、2016年度に最先端国際研究ユニット（WPI-next）の人文系のひとつとして採択され（2016～17）、更なる次元でのテクスト研究の飛躍と国際展開に向けて発進しようとしている。今後も、さまざまな国内外での共同研究や公募研究を助成・協働しつつ、あらたな人文学の展開に貢献したい。我々の取り組みに関心を抱き、また志を同じくするあらゆる研究者と連携して、CHTの機能を十全に発揮させたい。諸賢のご支援を心より望むところである。

表紙写真：杭全神社所蔵「聖徳太子絵伝」
サン=ドニ大修道院聖堂内陣集歩廊（12世紀中期）
デルフィ考古学博物館蔵「シフノス人の宝庫のフリーズ彫刻」

Research Center for Cultural Heritage and Texts

名古屋大学文学研究科附属

# 人類文化遺産テクスト学研究センター

## アーカイヴス部門

基幹教員

**阿部泰郎** Abe Yasurō ●文学研究科 教授

人類の貴重な文化遺産を、日本の宗教テクストを中心に探査・記録し、社会に共有することを任務として、国内外の所蔵機関やフィールドにおいて対象となるテクスト遺産のアーカイヴス化を実践すると同時に、テクスト学の学際的な共同研究を行う。阿部センター長の許で、三好俊徳・松山由布子両研究員を中心に、名古屋の大須文庫等の寺社の経蔵の聖教典籍から、奥三河の花祭などの民間の蔵書文献まで広汎な領域に取り組む。またその中で、日本に伝来する朝鮮本や高麗仏典などについて、韓国の大学や研究機関と共同でアーカイブス化を推進する国際研究事業にも取り組んでいる。

## 物質文化部門

基幹教員

**周藤芳幸** Sutō Yoshiyuki ●文学研究科 教授

地中海世界を主な研究対象として、古代ギリシア文明や古代エジプト文明のような人類史を彩る高文明の創造と継承が、いかなるテクストを介した複合的な知の伝達によって実現されたのかを解明する。とりわけ、口承、文字、図像（広義のモノ）に代表される知の伝達手段の相互関係とダイナミズムに焦点をしぼり、哲学、歴史学、考古学、美術史学の諸分野において国内外で活躍する研究者のネットワークを構築し、伝統的な専門分野の垣を超えた議論の場を創出することで、人文学に新たな展望を拓く。

## 視覚文化部門

基幹教員

**木俣元一** Kimata Motokazu ●文学研究科 教授

ヨーロッパを中心に、古代末期から中世を経て近世に至るまで機能した、宗教文化と知的システムを以下のような方法により解明する。キリスト教の聖堂、修道院などの宗教的領域、都市空間、さらには私的領域において、そこに設置されたり、領域内や領域間を移動したり、一時的に提示されたりする書物、絵画、彫刻、ステンドグラス、工芸といった各種の視覚的要素が、各種空間や個々の作品の内部または周辺において、その他の多様な物質的要素（建築、聖遺物、聖体、祭壇、墓、覆い）、あるいは音声や文字によって提供される言葉とともに相互関係の下に置かれることによって成り立つ展示／演出／認識形成プログラムを、人文学諸分野の研究者と連携し、仏教や神道などの他宗教との比較を交えて考察する。

## 研究協力部局

協力教員

**戸田山和久** Todayama Kazuhisa
●情報科学研究科 教授

**大平英樹** Ōhira Hideki
●環境学研究科 教授

**新美倫子** Niimi Tomoko
●博物館 准教授

**伊藤信博** Itō Nobuhiro
●国際言語文化研究科 助教

最先端国際研究ユニット（WPI-next）

## 文化遺産創成と記憶の力のテクスト学

名古屋大学における人文学の先端研究を、諸分野が協働して切り拓くため、学内公募 WPI-next に挑戦し採択された「文化遺産創成と記憶の力のテクスト学」は、フランソワ・ラショー（フランス国立極東学院・日本宗教文化史）や、ミギー・ディラン（名古屋大学・古典書誌学）が参画する国際的共同研究として、伝統的人文学の蓄積を「文化遺産」の創造生成に貢献しつつ、その文化的記憶を喚起して社会に問いかける、アクチュアルな試みである。阿部センター長と、安川晴基（名古屋大学・ドイツ文学）・伊藤大輔（名古屋大学・日本美術史）をメンバーとして、日本からアジアと欧米にまたがる広汎な学術ネットワークの構築を目指し、国際ワークショップやセミナーを各地で開催している。

2016年度活動速報●海外活動報告

アテネ碑文博物館ワークショップ

# 古代ギリシア碑文セミナー

2016年9月4日、アテネの碑文博物館において、ギリシア碑文学協会（Greek Epigraphic Society）の会長であり、ギリシアにおける碑文研究の最先端で活躍されているアンゲロス・マッセウ（Angelos P. Matthaiou）氏による、日本人大学院生向けの碑文セミナーが開催された。

碑文博物館は観光客で賑わう国立考古学博物館の隣にひっそりと佇む小さな博物館であるが、部屋中を埋め尽くすその碑文の数には思わず圧倒される。初めてギリシアを訪れた私は碑石の実物を目にするのもほぼ初めてであったが、普段本や論文で目にしているテクストの多くがここからやって来たのだと思うと、奇妙な実感と共に感動を覚えた。

マッセウ氏は本セミナーのために日本から集まった大学院生３名と研究者５名に対し、約３時間に及ぶ熱のこもった講演をしてくださった。碑文の種類といった基本的なことから碑文の年代特定を巡る学説史の解説まで、実際に碑文を見ながらご説明いただいた。碑文は古代に刻まれたありのままの文字にアクセスできるという利点があるが、長年の風化や人為的な損壊、石の転用といった要因により本来のテクストを読み取ることが難しいものが多い。それらの不明瞭なテクストをどう読み、どう再構成し、どう時代のなかに位置付けるか。ひどく摩耗した碑石を眺めながら、この作業がいかに複雑かつ困難であるかに思いを馳せた。私自身も卒業論文の執筆にあたって少し碑文資料を用いたことがあるが、当時は既刊の碑文集に収録されたテクストを絶対的なものとして扱ってしまいがちだった。しかし実際に碑文を目にして、いかに文字が判別困難なものであるかを痛感し、自分の目で見て確認することの重要性に気付かされた。碑石が断片なのか完存しているものなのか、文字が消えているのか元から空白だったのかなど、物質的な情報でさえ一見しただけでは判断しにくい例も多かった。

マッセウ氏がレクチャーの後半で説明してくださったデロス同盟研究に伴う碑文の年代特定の議論は、事実を反映すると思われる資史料と、それらを読んで解釈する人間の間に、少なからず溝が生まれてしまうことをよく示していた。史料は誰が読んでも同じ解釈を導くとは限らない。だからこそ自分の目で見て自分を納得させることが研究の大きな礎になる。当時の状態そのままを知ることはできないとはいえ、幸い碑文は現代まで現物が残っており、現地へ赴けばそれを確認することができる。日本に住んでいる私たちにとって時間的にも経済的にも負担であることは確かだが、現地に足を運んで実物を調べることが歴史研究にとって欠かせないプロセスであることを実感した。

初めてのギリシア訪問で、実際に碑文を前にして碑文学研究の最高峰であるマッセウ氏のレクチャーを受けることができ、本当に贅沢な時間を過ごさせていただいた。我々のためにレクチャーを準備していただいたマッセウ氏はもちろんのこと、レクチャーの実施にご理解をいただいた碑文博物館のスタッフにも感謝申し上げたい。

また、このセミナーは、名古屋大学人類文化遺産テクスト学研究センターの周藤芳幸教授を研究代表者とする科研費基盤(A)「古代地中海世界における知の伝達の諸形態」、及び千葉商科大学の師尾晶子教授を研究代表者とする科研費基盤(C)「小アジアにおけるグローバル文化としてのギリシア文化とその地域性に関する研究」の共催によって行われたものである。関係の先生方にも参加者を代表して心から御礼申し上げたい。

（小山田真帆 京都大学大学院文学研究科修士課程）

2016年度活動速報●共同研究協定

# 日韓宗教テクスト遺産共同ワークショップ

2016年７月、名古屋市の真福寺寶生院の大須文庫の調査を継続している人類文化遺産テクスト学研究センターと、「高麗教蔵」研究を主導する韓国・東国大学校仏教学術院および高麗大蔵経研究所の三者は、大須文庫所蔵「高麗教蔵」関係資料の共同研究を行うことで合意した。

10世紀後半の高麗王国で、王子にして僧となった義天により国内外から集められた仏教聖典は、「高麗教蔵」として大蔵経に続いて刊行された。これは「義天版」として知られ、早くより日本にも伝来している。そして日本でもこれをもととする書写もしくは開版・印刷がなされており、仏教学や宗教学の基本文献である「大正新修大蔵経」編纂の際には、高麗大蔵経とともにその底本となっている。大須文庫が所蔵する「高麗教蔵」関係資料は、それが日本中世において発展的に継承された写本および刊本である。この貴重な東アジアの宗教テクスト遺産をいかに共有するのかは人文学術上の大きな課題であり、本共同研究はその貴重な一翼を担うものとなるだろう。

７月14日～19日には、大須文庫や名古屋大学を会場として、韓国からは９名、日本からは10名が参加し、共同研究協定の締結とワークショップを開催した。14日に三者により協定を締結し、翌日から大須文庫で合同資料調査および資料のデジタル撮影を行った。18日には東国大学の金浩星教授より、現在の事業と今後の計画について報告があり、WPI-next により招聘した韓国学中央研究院の金鐘明教授により「韓国における仏教関連の世界遺産とその知的持続可能性」と題した講演が行われ、いずれも活発な意見交換が行われた。15日にはエクスカーションとして七寺の古写経の見学会も実施、日韓両国の宗教文化遺産の現状およびその研究状況について相互の認識を深め、今後の共同研究連携の基盤を作ることができた。（阿部泰郎　文学研究科教授・センター長）

WPI-next●東アジアの文化遺産の創成と記憶の力のテクスト学

# 名古屋市蓬左文庫所蔵 朝鮮本のアーカイヴス化

名古屋市蓬左文庫は、尾張藩の書物倉であった「御文庫」に端を発し、徳川家康の遺産である「駿河御譲本」を中心とする尾張徳川家の旧蔵書を所蔵する文庫である。蓬左文庫には和漢の優れた古典籍が伝えられているが、その中でも朝鮮王朝時代の書物（朝鮮本）は、世界有数のコレクションを誇っている。朝鮮半島では早くから金属活字による印刷が行われ、高麗時代（918～1392）や朝鮮王朝の時代（1392～1910）に、王朝が鋳造した独自の金属活字によって多くの書物が印刷された。特に重要文化財『高麗史節要』（全三十五冊）は、文宗二年（1452）に金宗瑞によって編纂された編年体による歴史書で、紀伝体の『高麗史』と共に、高麗時代の正史として高い文化的価値を持つ。蓬左文庫に所蔵される『高麗史節要』は、現存唯一の完本である。

文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センターでは、同「アジアの中の日本文化」研究センターと共に、徳川美術館・蓬左文庫開館80周年記念　秋季特別展日韓国交正常化50周年記念展「豊かなる朝鮮王朝の文化―交流の遺産」の開催（2015年9月19日～2016年1月8日）や、『高麗史節要』の全デジタルアーカイヴス化の事業に協力した。また同時に、国際シンポジウム「文化遺産としての朝鮮通信使」（2015年10月31日：文系総合館7階カンファレンスホール）を開催した。池内敏氏（名古屋大学教授）の司会のもと、ロナルド・トビ氏（イリノイ大学名誉教授）と朴贊基氏（木浦大学教授）による報告が行われ、日本と朝鮮半島との国交史における様々な文化遺産に焦点を当てた活発な議論が行われた。

蓬左文庫本『高麗史節要』のデジタルアーカイヴス化は、中世後期から近世における日本と朝鮮半島の歴史的な関わりや文化交流の研究の進展に大きく寄与するものである。また WPI-next「文化遺産創成と記憶の力のテクスト学」（代表：阿部泰郎）が対象とする、文化遺産を生成し支える文化的記憶についての国際研究連携プロジェクトとも、その研究主題を共有している。

今後は『高麗史節要』のデジタルアーカイヴス化を朝鮮本の全点の国際アーカイヴス化事業へと更に発展させ、書物に内在するアジアの歴史的・文化的な記憶の研究を、世界的な規模で展開する道筋を築くことが望まれる。

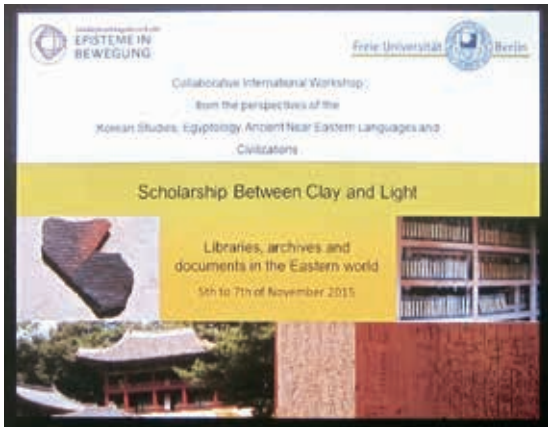
（松山由布子　文学研究科研究員）

WPI-next ● 東方世界の文化遺産の創成と記憶の力のテクスト学

# 粘土板から知識へ
## ——東方世界（オリエント・アジア）のライブラリー・アーカイヴスそして記録（ドキュメント）をめぐって

Scholarship Between Clay and Light : Libraries, archives and documents in the Eastern world

2015年11月5日㈭—7日㈯　ドイツ・ベルリン自由大学




ドイツにおける学術研究拠点形成（ドイツ版 COE）計画の、重点研究として採択されたばかりの、“流動する知（エピステーメー・イン・ベヴェーグンク）”を主題とする、ベルリン自由大学の研究グループは、エジプト学のヨヘム・カール教授を中心に、オリエント学および韓国学の研究者から構成される、ユニークな人文学の先端研究を開始している。カール教授とエジプトのフィールドを介して緊密な連携関係にある CHT の周藤芳幸教授が、CHT 創設記念コロキアム「前近代社会における知の伝達」の基調講演者としてお招きした、その際に阿部が報告したのを契機として、今回の国際研究集会に招聘されることになった。ここで阿部は、日本における歴史的なアーカイヴスとそれを構成するテクスト群の特色と機能および世界的な視野の許での意義を報告する任務を与えられた。

ベルリンに集った報告者は、米国・カナダ・フランスおよび韓国から、オリエント・アジア各地域の古代から近世にかけての歴史・考古・文献学の専門研究者であり、各自のフィールドや対象に則して、その先端的な知見にもとづき、普遍的な理論化のための議論の地平を求められた。対象となったのは、古代エジプトとギリシア・ローマの東方属州、古代バビロニアなど、オリエント研究の成果による遺構・遺物からのライブラリー・アーカイヴス空間とそのテクストの復元的考察、そして極東の韓国と日本における古代から近世まで歴史的に連続する、宮廷から民間までの蔵書の空間と機能が提示された。そこにアジア文明の中心であるインドと中国の事例が報告を欠いたのは残念であったが、逆にその空白を挟んで、時空を超えた東方諸文明の創出したライブラリーとアーカイヴスの達成とその果した役割が、巨視的にうかびあがり対象化されることになった。その一端を、CHT に結集した、愛知を中心として日本全体を展望する文化遺産アーカイヴス研究の蓄積が担い、成果が生かされたといえよう。

このワークショップで共有されたいくつもの課題のひとつは、それらの達成としてのアーカイヴス遺産が、果たして王権や宗教的権威のみに拠って成り立ち、また奉仕する役割だけで存続したのか、という疑問である。国家や宗教を相対化する“知の担い手”たちの存在も、そこに紹介された厖大な時空のなかの事例から照らし出され、そのテクストや遺物・遺構に営みの痕跡をのこす、彼らの果たした役割を解明することも、テクスト解釈に携わる我々人文学研究者共通の課題であることが、あらためて自覚されることになった。

研究集会に続いて、CHT の周藤教授によるエジプト・アコリスの遺跡発掘をめぐる講演が9日に開催された。また、本学の WPI-next 準備ユニット「文化遺産創成と記憶の力のテクスト学」研究分担者で、ベルリン自由大学の留学経験者であるドイツ文学研究の安川晴基准教授も参加し、そのレクチャーと案内によって、ベルリンにおける戦争やホロコーストに関わる記憶の場（クロノトポス）を歩いて検証し、巨大なミュージアム複合都市ベルリン訪問における貴重な経験となったことも、今回の大きな収穫であった。

（阿部泰郎　文学研究科教授・センター長、
WPI-next「文化遺産創成と記憶の力のテクスト学」研究代表）

国際ワークショップ

# 末期王朝・プトレマイオス朝エジプトにおけるテクストと社会

Text and Society in Egypt in the Late and Ptolemaic Period

2015年11月25日㈬　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

古代エジプトでは、パピルスが知の伝達媒体として広く用いられ、その乾燥した気候条件のために、多くのパピルス文書が遺存している。そのため、紀元前一千年紀の末期王朝時代からプトレマイオス朝、さらにはローマ時代にかけてのエジプト社会については、徴税記録や契約書、請願書や各種の行政上の指示書、さらには多岐にわたる内容の私人間の書簡などの膨大なパピルス文書を史料として用いることが可能となっており、その解読と分析を中心課題とするパピルス学の重要性はきわめて高い。一方で、末期王朝時代からヘレニズム時代にかけては、ギリシア人の移住とギリシア系の外来王朝の支配に伴って、エジプト社会にも大きな変動が生じていたと考えられる。それでは、末期王朝時代のデモティックの創案、そしてヘレニズム時代のギリシア語の普及は、エジプトにおけるパピルスを通じた知の伝達のあり方にどのような影響を及ぼしたのであろうか。このような問題意識のもと、平成27年度科学研究費補助金基盤研究(A)「古代地中海世界における知の伝達の諸形態」の研究代表者である周藤芳幸（名古屋大学）と、東海大学総合研究機構において「東海大学所蔵古代エジプト修復保存・解読・出版に関わる国際プロジェクト」を推進している同研究分担者の山花京子（東海大学）とによって企画された本国際ワークショップは、現在パピルス学の最前線で精力的に活躍している研究者をゲストに迎えて、紀元前一千年紀のエジプトにおけるパピルスを通じた豊穣な知の伝達の世界を探求することを目的として開催されたものである。

当日は、名古屋大学文学研究科の佐久間淳一研究科長による開会挨拶の後、まず周藤芳幸が「末期王朝・プトレマイオス朝エジプトにおけるテクストと社会」と題する問題提起を行い、該期の歴史研究に果たしてきたパピルス学の意義を認めながらも、碑文やグラフィティなどの史料を参照することにより、その成果を相対化する必要もあることを論じた。続いて、プロイセン文化財団ベルリン国立博物館群修復士として長年にわたってパピルスの修復に取り組んできたミリアム・クルシュが、「グレコ・ローマン時代におけるパピルス素材とその構造、質に見られる変化」と題して、媒体としてのパピルスそのものの変化を論じた。ジョンズ・ホプキンス大学教授のリチャード・ジャスノウ

博士の報告は、「デモティックおよびヒエラティックによるベストセラー―グレコ・ローマン時代の宗教的パピルス文書に関する所見」というもので、デモティックの専門家の立場から、多くのパピルスが残されている宗教文書の内容が紹介された。山花京子による「ギリシアと古代エジプトの接点―ファイアンス護符製作に関する技術的考察」は、古代エジプトで護符などに多用されたファイアンスの成分分析の研究報告であり、パピルス史料などには現れない技術的な知識の伝達に関して、興味深い考察が提示された。

午後の部の最初には、大阪大学大学院でプトレマイオス朝史を専攻する石田真衣が、「ソクノパイウ・ネソスにおける紛争処理―デモティック及びギリシア語嘆願書を通して」と題する研究報告を行った。次に、ジョンズ・ホプキンス大学で博士論文を準備中のキャサリン・デイヴィスが、「語彙集とオノマスティカ―グレコ・ローマン時代の書記文化と神官の知識」について報告した。最後の発表者であるイェール大学教授のジョセフ・マニング博士は、これまでにも何度か名古屋大学に来学して講演を行っているが、この日は「古代テクストを通じた気候変動への理解―古代テクストと現代科学の間の緊張関係」と題して斬新な内容の報告を行った。

パピルス学は基本的にパピルスのコレクションがある国の研究機関を中心に進められてきた経緯があり、この種のワークショップが日本で行われるのはおそらく初めてではなかったかと思われる。このような貴重な機会を持つことができたのは、ひとえにジョセフ・マニング博士と山花京子氏の協力のおかげであり、この場を借りて深く感謝申し上げたい。

（周藤芳幸 文学研究科教授）

海外ワークショップ

# 絵解き文化への招待

2015年10月9日㊎　フランス国立東洋言語文化大学（INALCO）

2015年10月9日、フランス国立東洋言語文化大学（INALCO）においてワークショップ「絵解き文化への招待」が開催された。ワークショップには、日本から絵解き実演のため後述する4名が参加した。総合司会と解説は阿部泰郎氏（名古屋大学）と伊藤信博氏（名古屋大学）が、コメンテーターは高橋亨氏（椙山女学園大学）、小林健二氏（国文学研究資料館）がそれぞれ務めた。

絵伝や絵巻などに描かれた絵を物語として語る絵解きは、かつては日本の至るところで行われており、映画やテレビ以前のメディアとして享受されていた。そこでは寺社縁起や霊験の物語、地獄極楽、親子の恩愛などが絵を介して民衆に語られ、絵に描かれた世界の教えを人々に伝えていたのである。本ワークショップでは、この絵解き文化を国際的に発信することを目的として、多彩な絵解き文化の一端を伝える長野県西光寺の絵解き、富山県城端別院善徳寺の絵解きをはじめとして、現代に復活した聖徳太子絵伝の絵解きや、あらたに創られた神社の縁起絵巻を絵解く試みが披露された。

はじめに末松（名古屋大学）が、城端別院善徳寺に伝わる聖徳太子絵伝から、「太子と守屋の戦い」の場面を絵解きした。本絵伝の絵解きは2007年に名古屋大学阿部泰郎教授のもとで復活したものであり、以来善徳寺虫干法会で名古屋大学の学生により毎年実演されている催しである。

また城端別院善徳寺からは、近年国際的な絵解き師として活躍する馬川透流氏（城端別院・真教寺）が参加し、善徳寺において継承されてきた蓮如上人御絵伝の絵解きのうち「堅田源兵衛生首の段」を披露した。

次に阿部美香氏（昭和女子大学）による走湯山秘訣絵巻の絵解きが行われた。走湯山秘訣絵巻は、2011年に静岡県伊豆山神社において制作された平成の縁起絵巻であり、阿部氏自身が手掛けた詞書を読み上げながら絵解きをするという新しい試みであった。

最後に、西光寺の開山上人の物語として、竹澤環江氏（西光寺）による苅萱道心石童丸御親子御絵伝の絵解きが行われた。「絵解きの寺」として知られる西光寺では現在も参拝者の求めに応じて絵解きを行っており、語り物芸能としての絵解き文化を今に伝えている。

当日は、フランス国立東洋言語文化大学の協力によって通訳が入り、各絵解きの台本はフランス語に翻訳されて参加者に配布された。会場に集まった200名ほどの聴衆からはさまざまな意見や質問が寄せられ、日本の絵解き文化に対する関心の高さがうかがわれた。絵解きとは決して日本国内の関心に留まるものではなく、国際的に注目される文化メディアであることを感じさせるものであった。今後もこのようなワークショップを通じて、世界的な文化遺産ともいうべき絵解き文化を、積極的に海外に発信していくことが求められるだろう。（末松美咲　文学研究科博士研究員）

国際研究集会

# 日本の文化遺産としての絵物語

L'héritage culturel des ouvrages illustrés japonais des époques Muromachi et Edo (16–17e siècles)

2015年10月2日㊎・3日㊏　フランス・ストラスブール大学

2015年10月２日・３日、人類文化遺産テクスト学研究センターが主催する国際研究集会「日本の文化遺産としての絵物語」が、フランス・ストラスブール大学において開催された（ストラスブール大学外国語外国文化学部日本学学科・アルザス日本学研究所共催）。２日間を通じ、日仏の日本文学研究者計７名が研究発表を行った。

第１日目は、３名の発表があった。

はじめに、石川透氏（慶應義塾大学）は、「異類の登場する奈良絵本・絵巻」と題して、氏が所蔵する「竹取物語」や「鶏鼠物語」などの奈良絵本・絵巻の紹介を行った上で、これらが制作された背景についても論じた。なお、同日、会場には上記のほか、「酒呑童子」や「秋の夜の長物語」などが展示され、研究発表の前後に見学の時間が設けられた。参加者の中でも、フランス人の学生たちが貴重な資料を熱心に見入っていたのは、印象的だった。

次に、ミュラール・デルフィーヌ氏（慶應義塾大学）は、「奈良絵本・絵巻の制作、写本と版本の関係―『文正草子』を中心として」というタイトルで、『文正草子』諸本に描かれた人物画像の比較を通じて、それらの制作をめぐる背景や意図を論じた。

この日の最後に、伊藤信博氏（名古屋大学）は、「百鬼夜行絵巻と是害坊絵巻」という題目で、「百鬼夜行絵巻」や「是害坊絵巻」に着目し、絵巻の中に描かれた植物や食物の分析を行い、植物・食物の絵画化と「草木国土悉皆成仏」思想との関連を指摘した。

翌第２日目には、４名の研究発表があった。

まず、高橋亨氏（椙山女学園大学）は、「物語絵の〈雅〉〈俗〉と十七世紀の和文古典学」という題目で、〈雅〉と〈俗〉

の文化が交流、交差することによって、独特ともいえる江戸文化が形成された点について、『源氏物語』を始めとする古典文学と絵物語を中心に論じた。

次に、龍澤彩氏（金城学院大学）は、「源氏絵の系譜―描き継がれた『源氏物語』」と題し、『源氏物語』を絵画化した源氏絵が、平安時代から現代に至るまで、絵巻、扇、屏風、映画などのさまざまな媒体や、他の画題との交錯の中で多様化する様子とその特色を明らかにした。

そして、末松美咲氏（名古屋大学）は、「稚児物語の展開―お伽草子『硯わり』『花みつ月みつ』を中心として―」という題目で、稚児が身代わりとなって死ぬ様を描いた『硯わり』、『花みつ月みつ』を取り上げ、これらの物語が稚児を神聖視する稚児物語として位置づけられることを述べた。

最後に、阿部泰郎氏（名古屋大学）は、「天地を結ぶ恋の絵ものがたり―『天稚彦』絵巻の伝承とイメージ―」と題して、ベルリン東洋美術館蔵『天稚彦』絵巻の図像を紹介しながら、この絵巻が日本の中世から近世に広く流布し、世界的に普遍な話型をも有する点を論じた。

以上の研究発表ののち、コメンテーターである小林健二氏（国文学研究資料館）から、それぞれの発表に対するコメントをいただき、研究集会は幕を閉じた。

ヨーロッパでの日本研究の拠点であるアルザスにおいて、日本の絵物語の多彩な世界が浮き彫りとなった、非常に意義深い研究集会であった。また、２日間を通じて、延べ100名を超える聴衆で会場は盛況を呈した。特に数多くのフランス人学生の参加があり、今後の日本研究が、より国際的に発展していくことを予感させたのであった。

（畑 有紀　国際言語文化研究科学術研究員）

WPI-next ● 東南アジアの文化遺産と記憶の場

# 東ジャワ文化遺産をめぐる連携プロジェクトの可能性と展望

2016年1月28日㈭—30日㈯　インドネシア・スラバヤ大学

人類文化遺産テクスト学研究センターではWPI-next準備ユニット「文化遺産創成と記憶の力のテクスト学」の活動として、インドネシア共和国東ジャワ州スラバヤ市の国立スラバヤ大学との共同ワークショップを実施した（2016年1月28～30日）。国立スラバヤ大学は本学の学術協定機関である関係から、今回の企画は本学で博士号（日本語学）を取得したジョジョック・スパルジョ副学長および芸術言語研究科の全面的協力で実現した。

初日の活動は学長室訪問と大学見学（都心部の旧学舎と西部の新学舎）が中心となった。我々はスパルジョ副学長の案内のもと、まずは学長棟を含む旧学舎を訪問した。学長室ではワルソノ学長をはじめとする幹部諸氏からの歓待とともに、社会学博士の学長から「今後名古屋大学との研究連携がインドネシアの誇る文化的多様性の伝承と発展に寄与することを期待します」と本企画への心強いエールをいただいた。その後は同敷地内の社会学部歴史研究科にてジャワ考古学資料やボロブドゥール遺跡の模型を見学し、さらに新学舎に移設された芸術言語研究科の訪問を通じて自由闊達な教育研究環境に触れることができた。

二日目は共同シンポジウムを実施した。スパルジョ副学長の司会のもと、まずは代表の阿部泰郎が「文化遺産創成と記憶の力のテクスト学」の趣旨説明を行い、これをふまえたグローバル・ネットワーク構築の意義およびインドネシアとの連携研究の重要性を論じた。続いて本学からは日本語学研究（宮地朝子）、ドイツ文化研究（安川晴基）、フィリピン文化研究（東賢太朗）、インドネシア文化研究（野澤暁子）の各専門から、共通テーマ「文化遺産と記憶」に関わる発表を行った。その後国立スラバヤ大学芸術言語研究科からは、「記憶の構築」をテーマとする現代美術研究者ジュリ・ジャティプランブディ氏、言語教育政策の研究者ディディック・ヌルハディ氏等から意見が出され、刺激的な議論が展開した。

三日目は東ジャワを代表する文化遺産「トゥロウラン遺跡群」の見学を行った。現在ジャワ全域ではイスラム文化が定着しているが、トゥロウラン遺跡群は中世に栄えたヒンドゥー教王国マジャパイトの都の痕跡として重要な歴史的価値をもつ。見学には高名な考古学者ヨハネス・ハナン氏が中心となり、各遺跡の歴史的背景や特徴を丁寧に解説した。全日で合計10の遺跡を巡り、東ジャワ歴史文化遺産の価値を知る上で貴重な内容となった。

以上のように今回は短期間ながら充実した成果をおさめるに至ったが、ここで一層重要となるのは今後の展開である。研究上の連携はもとより、二日目の討議ではスラバヤ大側から「教育上の相互交流（院生の派遣等）」の重要性が指摘された。若者大国インドネシアの将来性と併せ、確かに日イ共同の次世代育成は両国の知的・文化的エンパワーメントへの貢献が期待される。文化遺産に関しては、近年イスラム過激派の追随集団がジャワ各地に残る無名のヒンドゥー遺跡を撤去・破壊しているという報告もある。この現状の中、「研究—教育—社会」の発展的循環を目指した国立スラバヤ大学と名古屋大学の協働関係の構築は、世界的視野にもとづく「文化遺産の創成」にとって着実な一歩となると考えられる。

（野澤暁子　文学研究科博士研究員）

国際シンポジウム ● ハイデルベルク大学共催

# 聖なるもののイメージとマテリアリティ

The Materiality of the Sacred in Japan and Europe

2016年2月29日㈪―3月2日㈬　ドイツ・ハイデルベルク大学

人類文化の遺産を、諸分野の学術知見を結集して総合的に研究し、その普遍的価値を明らかにしつつ国際的に共有することが、CHT の長期的な課題である。その試みのひとつが、宗教のうみだす〈聖なるもの〉の形象である。これは、あらゆる宗教において志向される現実を超えた〈聖なるもの〉が常に物質性に根ざして発現する逆説的（パラドキシカル）な事態が、さまざまな宗教の展開の局面で生じていることに注目するものである。それは文字に限らず、図像（イメージ）・身体・聖遺物・音声・建築や都市の空間・自然または人工の景観といった多様な要素によって織りなされるテクストにおいて現象している。この関係構造を読み説くことは、これらのテクストを拠りどころとして、人文学の地平を押し広げようとする CHT の挑戦のひとつである。よりグローバルな視野の許に、仏教、キリスト教、および民族宗教における多様な宗教実践を詳細に分析・比較することにより、総合的な展望の獲得と考察の深化を目指す試みといえよう。

ハイデルベルク大学は、ドイツにおける研究拠点形成事業として、クラスター・オブ・エクセレンス「グローバル・コンテクストにおけるアジアとヨーロッパ」プロジェクトを推進するが、その中核的担当者の一人、日本美術史のメラニー・トレーデ教授を2015年に CHT に招聘したことにより、上記の研究課題がうかびあがった。これを契機として、具体的な報告と討議の場を、メラニー教授とアンナ・アンドレーワ氏の尽力により、2016年3月にハイデルベルクにおいて持つことができた。この国際シンポジウム「中世日本とヨーロッパにおける聖なるもののイメージとマテリアリティ―仏教・神道・キリスト教」は、同大学カール・ヤスパース・トランスカルチャー高等研究センターにおいて、2016年 2 月29日から 3 月 2 日の三日間にわたり開催された。

はじめに基調講演として阿部による「中世日本における〈聖なるもの〉のマテリアリティ―善光寺如来をめぐる造像・伝承・宗教空間」というタイトルのレクチャーを行い、日本側は CHT の木俣元一教授によるシャルトル大聖堂ステンドグラスの宗教図像体系と聖者の聖遺物の堂内布置の連関についての報告、東京大学秋山聡教授の東西の聖遺物信仰の比較からうかびあがる普遍性の提唱のほか、筑波大学の近本謙介准教授、昭和女子大学の阿部美香氏、パリ・ディドロ大学のクレール=碧子・ブリッセ氏、ストラスブール大学の勝谷祐子氏、ハンブルク大学のヨーグ・クヴェンツァー氏をはじめ、参加した研究者や大学院生による多彩な宗教造型／宗教行為とそのテクストに関する報告や活発な意見交換が行われた。

この間に、ハイデルベルク大学の研究プログラムのひとつ、中国仏教石刻プロジェクトの特別セミナーも設けられ、その成果の一端を教示いただいた。まさしく宗教テクストの偉大な遺産のひとつを、両国の研究者の国際連携によって再現・復原する企ては、プログラムのエクスカーションでめぐった、フランスにより王位継承戦争で破壊されたままの状態をとどめるハイデルベルクの古城と、シュパイヤー・ウルムの両ロマネスク大聖堂と共に深い印象を刻み込んだ。今後もこのテーマの許で、両大学間で継続的に研究交流が行われることも、今回のシンポジウムの成果である。　（阿部泰郎　文学研究科教授・センター長）

※特に記載のないものは、CHT主催

## 2015年度活動報告

### 公開講演会

**メキシコの世界遺産**

（後援：名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室）

ロベルト・ルナゴメス［ベラクルス大学教授］

2015年4月28日㈫14:45–16:15　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

**エルサルバドルの文化遺産と国際協力**

（主催：国際交流基金
共催：CHT　協力：古代遺産国際協力コンソーシアム・古代アメリカ学会）

ラモン・D・リバス［エルサルバドル共和国文化庁長官］

2015年10月7日㈬15:00–17:00　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

センター紀要
『HERITEX』掲載

**書物の王国　愛知の文庫と典籍―『愛知県史 別編 文化財4 典籍』の編さんを通して**

（共催：愛知県県史編さん室
科研(S)「宗教テクスト遺産の探査と綜合的研究――人文学アーカイヴス・ネットワークの構築」）

岡田荘司［國學院大學教授］「真福寺本古事記と熱田本日本書紀」

四辻秀紀［徳川美術館学芸部長］「徳川美術館に伝えられた典籍」

桐原千文［名古屋市蓬左文庫長］「蓬左文庫の成立と発展」

2015年9月12日㈯13:00–16:30　名古屋大学野依記念学術交流館 ホール

### 公開セミナー

▶ WPI-next 準備ユニットの活動の一環

**21世紀の〈村落共和国〉をめざして**
――バリ島先住民村落と聖なる鉄琴スロンディンをめぐる
〈文化の内と外〉との新たな関係構築

（共催：科研(S)「宗教テクスト遺産の探査と綜合的研究――人文学アーカイヴス・ネットワークの構築」）

野澤暁子［名古屋大学文学研究科博士研究員］

2015年5月27日㈬15:00–17:30　名古屋大学文学部棟 大会議室

センター紀要
『HERITEX』掲載

**旧人ネアンデルタール人の脳を復元して新人サピエンスの脳と比べる**

（共催：科研(S)「宗教テクスト遺産の探査と綜合的研究――人文学アーカイヴス・ネットワークの構築」）

田邊宏樹［名古屋大学大学院環境学研究科心理学講座教授］

2015年7月4日㈯13:30–15:00　名古屋大学文学部棟 大会議室

**聖なる場におけるイメージと「もの」**（後援：名古屋大学大学院文学研究科美学美術史学研究室）

水野千依［青山学院大学］「「神聖空間」と「場の模倣」――トスカーナの聖母像崇敬を例に」

木俣元一［名古屋大学］「「展示プログラム」としてのゴシック聖堂」

秋山 聰［東京大学］「儀礼における聖遺物、聖体および聖像」

2015年7月11日㈯13:00–17:30　名古屋大学文学部棟 131講義室

**大モンゴル『シャーナーメ』写本の挿絵を読む／イコンとアイドル：ほとけと仏像**

桝屋友子［東京大学東洋文化研究所］「大モンゴル『シャーナーメ』写本の挿絵を読む」

鐸木道剛［岡山大学文学部］「イコンとアイドル：ほとけと仏像」

2015年11月14日㈯13:00–17:30　名古屋大学文学部棟 131講義室

▶ WPI-next 準備ユニットによる招聘研究者の研究交流

**荒野のアーカイヴス——フランス・プロバンス地方におけるユグノー共同体の記録と記憶**

フランソワ・ラショー［フランス国立極東学院教授］

2015年11月16日㈪14:45–15:15　名古屋大学文学部棟 比較人文学講座リテラチャーラボ

## 国際研究集会

▶ WPI-next 準備ユニットの活動の一環

P.5参照

**文化遺産としての朝鮮通信使**（※名古屋大学国際化推進研究集会支援による）

（共催：名古屋大学大学院文学研究科附属「アジアの中の日本文化」研究センター
科研(S)「宗教テクスト遺産の探査と綜合的研究——人文学アーカイヴス・ネットワークの構築」）

2015年10月31日㈯　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

センター紀要
『HERITEX』掲載

## 国際ワークショップ

**末期王朝・プトレマイオス朝エジプトにおけるテクストと社会**

P.7参照

（主催：科研(A)「古代地中海世界における知の伝達の諸形態」
共催：東海大学総合研究機構「東海大学所蔵古代エジプト修復保存・解読・出版に関わる国際プロジェクト」）

2015年11月25日㈬9:00–17:00　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

## 国際講演会

**言葉のリズムと夢のイメージ**

（共催：名古屋大学大学院文学研究科附属「アジアの中の日本文化」研究センター
科研(S)「宗教テクスト遺産の探査と綜合的研究——人文学アーカイヴス・ネットワークの構築」）

李 炯宰［韓国国立木浦大学校］「韓国人初級学習者の日本語のリズムの聴取パターンの分析」

平野多恵［成蹊大学］「明恵上人『夢記』研究の現在」

2015年8月11日㈫13:30–17:00　名古屋大学情報文化学部 多目的講義室

## フォーラム

2015年井波絵解きフォーラム

**南砺の聖徳太子信仰と絵解き文化を探る**

（共催：東京国立博物館・真宗大谷派井波別院瑞泉寺・真宗大谷派高岡教務所
協力：凸版印刷株式会社、協賛：北日本新聞）

沖松健次郎［東京国立博物館主任研究員］「聖徳太子絵伝入門」

阿部泰郎［名古屋大学教授］「法隆寺と井波を結ぶ信仰の道——南無仏太子と絵伝の世界」

土屋貴裕［東京国立博物館研究員］「聖徳太子絵伝鑑賞の場」

2015年6月6日㈯13:30–16:30　井波総合文化センター メモリアルホール
7日㈰13:30–16:30　井波別院瑞泉寺太子堂

城端絵解きフォーラム **日本の絵解き文化と南砺の絵解き**

（共催：城端別院善徳寺・真宗大谷派高岡教務所・北日本新聞）

2015年10月17日㈯13:30–17:00　じょうはな座

## 海外ワークショップ

**絵解き文化への招待**（主催：フランス国立東洋言語文化大学）

P.8参照

2015年10月9日㈮16:30–20:00　フランス国立東洋言語文化大学（INALCO）

## 展覧会

**蓬左文庫「豊かなる朝鮮王朝の文化 朝鮮本と通信使」** P.5参照

※「高麗史節要」デジタルデータベース化完成：韓国国史編纂室に提供（予定）

2015年9月8日㈫—11月2日㈪

## 海外大学国際研究集会

国際研究集会 P.9参照

### 日本の文化遺産としての絵物語

L'héritage culturel des ouvrages illustrés japonais des époques Muromachi et Edo (16–17e siècles)

（主催：ストラスブール大学外国語外国文化学部日本学学科・アルザス日本学研究所）

2015年10月2日㈮14:00–17:00・3日㈯13:30–17:00　フランス・ストラスブール大学

国際学術講演会（※名古屋大学国際化推進支援による）

（共催：ストラスブール大学美術史研究室）

木俣元一［名古屋大学］"Le « voile du temple (velum templi) » dans les diagrammes circulaires de l'Hortus deliciarum."

2015年12月2日㈬15:00–16:30　フランス・ストラスブール大学

国際シンポジウム P.11参照 センター紀要『HERITEX』掲載

### 聖なるもののイメージとマテリアリティ　The Materiality of the Sacred in Japan and Europe（共催：ハイデルベルク大学）

2016年2月29日㈪—3月2日㈬　ドイツ・ハイデルベルク大学

## 海外大学国際研究集会招聘・参加

▶ WPI-next 準備ユニットによるメンバー参加 P.6参照

### 粘土板から知識へ——東方世界（オリエント・アジア）のライブラリー・アーカイヴスそして記録（ドキュメント）をめぐって

Scholarship Between Clay and Light: Libraries, archives and documents in the Eastern world

阿部泰郎［名古屋大学］「知のトポスもしくはアーカイヴスとしての「宝蔵」——日本における〈知の遺産〉の形成と展開」

2015年11月5日㈭—7日㈯　ドイツ・ベルリン自由大学

### 非日常経験と日韓古典文学

阿部泰郎［名古屋大学］「異界との交信と宗教テクスト——中世日本の精神史の一断面」——『日本學研究』第48輯（2016）

2015年10月25日㈰　韓国・檀国大学日本研究所

▶ WPI-next 準備ユニットの活動 P.10参照

### 東南アジアの文化遺産と記憶の場

2016年1月28日㈭—30日㈯　インドネシア・スラバヤ大学

## 2016年度の研究活動

国際研究会議

### コレージュ・ド・フランス合同国際研究会議「宗教テクストとしての論議と宗論」

2016年7月19日㈫　名古屋大学文学部棟 大会議室

国際研究交流会（名古屋大学「アジアのなかの日本文化」研究センターと共同）

### 台湾大学共同国際研究交流会

2016年5月14日㈯・15日㈰　台湾大学

## 公開講演会・公開セミナー

### 17世紀フランスにおける宗教とテクスト

ジャン=レイモン・ファンロー［エクス=マルセイユ大学］

2016年4月22日㊎13:30–14:30　名古屋大学文学部棟 130会議室

### 巡礼の考古学――スーダンのキリスト教化を媒介として

坂本 翼［リール第三大学］

2016年7月1日㊎16:00–18:00　名古屋大学文学部棟 130会議室

### 韓国における仏教関連の世界記憶遺産とその知的持続可能性

▶WPI-next による研究交流 P.5参照

金 鐘明［韓国学中央研究院］

2016年7月18日㊊15:00–17:00　名古屋大学文学部棟 大会議室

### ニューヨークから見た東アジアのなかの日本美術

渡辺雅子［元メトロポリタン美術館主任研究員］

2016年8月8日㊊15:00–16:30　名古屋大学文学部棟 大会議室

### ギリシア碑文セミナー

P.4参照

アンゲロス・マッセウ［ギリシア碑文学協会］

2016年9月4日㊐11:00–14:00　アテネ碑文博物館

### F for Foax 美術史の／における贋造

ヘンリ・キーゾル［ハイデルベルク大学］

2016年9月7日㊌14:00–16:30　名古屋大学文学部棟 131講義室

### 『仏法大明録』と円爾

▶WPI-next による研究交流

曹 景惠［台湾大学］

2016年9月23日㊎15:00–16:30　名古屋大学文学部棟 大会議室

## 公開フォーラム

### 研究フォーラム 越境する絵ものがたり（共催：岩瀬文庫・国文学研究資料館）

総合司会　石川透［慶應義塾大学］　コメンテーター　阿部泰郎［名古屋大学］

高橋 亨［椙山女学園大学］「源氏の物語としての酒呑童子と王朝物語」

阿部美香・筒井早苗・藤井奈都子・龍澤 彩「展覧会を楽しむ――「越境」ワンポイント講座」

小林健二［国文学研究資料館］「神代物語の兄弟現る！」

齋藤真麻理［国文学研究資料館］「姫君の育て方――御伽草子点景」

江口啓子・鹿谷祐子・服部友香・末松美咲「特集『児今参り』研究報告――新発見の白描絵巻をめぐって」

2016年9月17日㊏13:00–16:30・9月18日㊐11:00–16:30　西尾市岩瀬文庫

### 安城絵解きフォーラム 聖徳太子絵伝と日本の絵解き文化

【第一部】座談会 聖徳太子絵伝と絵解き文化

司会　天野信治［安城市歴史博物館］

ゲスト　阿部泰郎［名古屋大学］・鷹巣 純［愛知教育大学］・土屋貴裕［東京国立博物館］・吉原浩人［早稲田大学］

【第二部】聖徳太子絵伝絵解き

末松美咲［名古屋大学大学院］「甲斐の黒駒」・郭 佳寧［名古屋大学大学院］「太子衡山へ翔ぶ」

2016年10月9日㊐13:00–16:00　安城市歴史博物館 エントランスホール

## 通年の基盤的調査と研究連携

**「真福寺大須文庫調査研究会」の活動支援**

重要文化財一括指定のための悉皆調査・データ入力・デジタル画像化の実施

『中世禅籍叢刊』編集・公刊のための調査・研究

**「勧修寺聖教文書調査団」の活動支援**

重要文化財一括指定のための聖教目録作成

**人間文化研究機構との共同研究**

「列島の祈り―日本・儀礼テクストの世界」展示企画立案と共同研究（2015～18）

**「花祭アーカイヴス」構築の活動支援**

奥三河花祭資料伝承者・所蔵機関への現地調査・デジタル画像化

## 刊行本の紹介

### 定期刊行物

**HERITEX vol.1**

2015年10月

人類文化遺産テクスト学研究センター（CHT）は、人類にとってかけがえのない文化の遺産すべてをテクストとしてとらえ、アーカイブス・物質文化・視角文化の3つの視角を軸に、創造や意義をテクストとして読み解く統合テクスト学の知見より、人文学研究の新たなステージを目指す研究機関である。本誌はCHTが主体となった研究活動の成果や、関連・連携する諸機関や研究者の人類文化遺産をめぐるさまざまな調査や発見についての速報を、広く紹介するものである。

### 学術研究資料集

**中世禅籍叢刊**

中世禅籍叢刊編集委員会（阿部泰郎ほか）編

臨川書店

**第2巻 道元集**

2015年7月　総672ページ

**第3巻 達磨宗**

2015年7月　総672ページ

**第8巻 中国禅籍集 1**

2016年1月　総480ページ

**第9巻 中国禅籍集 2**

2016年3月　総560ページ

『中世禅籍叢刊』は、真福寺と金沢文庫を中心とした日本の寺院・文庫に所蔵されている貴重な禅に関する書物の本文を影印・翻刻により示し、それに解題を付して紹介する叢書である。CHTの全面的な協力のもとで、2013年から臨川書店より刊行が続けられており、2015年度には『道元集』『達磨宗』『中国禅籍集1』『同2』の4冊が上梓された。いずれも日本における禅宗の思想やその位置づけについて再考を促す書物が紹介されており、禅宗史さらには日本仏教史の研究には必携である。

研究成果の社会還元

### 一般書籍・図録等

**図録 豊かなる朝鮮王朝の文化**

蓬左文庫編　2015年9月

名古屋市蓬左文庫が収蔵する和漢の優れた古典籍のうち、尾張徳川家に伝わった朝鮮王朝時代の書物（朝鮮本）や朝鮮通信使に関する記録などを通して、朝鮮王朝時代の豊かな文化と日韓両国の交流の歴史を紐解く。名古屋大学「人類文化遺産テクスト学研究センター」、同「アジアの中の日本文化研究センター」、名古屋市蓬左文庫による重要文化財『高麗史節要』（全三十五冊）のデジタルアーカイヴス化事業の成果も収録される。

**豊田市史研究特別号 猿投神社の典籍**

新修豊田市史編さん専門委員会編／阿部泰郎監修

豊田市　2016年3月　142ページ

西三河の古社、猿投神社に伝来する漢籍（国指定重要文化財）と図書（愛知県指定文化財）からなる古典籍、および旧神宮寺の聖教等のテクスト遺産の全体像を収録し紹介する。CHTが全面協力した新修豊田市史編さん事業の最新の成果が盛り込まれると共に、全てのアーカイブス化の手引きともなる図録として編集した。

Research Center for Cultural Heritage and Texts

名古屋大学文学研究科附属 人類文化遺産テクスト学研究センター ニューズレター No.2

発行日　2016年9月30日

発　行　名古屋大学文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センター

〒464-8601 名古屋市千種区不老町　TEL/FAX: 052-789-5697

http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/cht/　E-mail: cht@lit.nagoya-u.ac.jp

科研費 KAKENHI

JSPS（26220401）